やまとぐさ　第4号：1－8

向坂道治と牧野富太郎の交流
－二人の遣り取りした書簡から見える植物図鑑編纂の道のり－

田中 純子
練馬区立牧野記念庭園

はじめに

練馬区立牧野記念庭園には牧野富太郎（1862–1957）のご遺族よりお預かりした資料がある．本稿ではその中より，牧野が非常に懇意にしていた向坂道治（1895–1979）に宛てた牧野の書簡類（葉書 197 通･手紙 1 通･名刺 3 枚）について論じる．この書簡類の由来は不明であるが，アルバムに一枚ずつ，ほぼ年代順に差し込まれきちんと整理されてあることから（図 1a, b），おそらく向坂自身が整理して牧野の没後ご遺族に渡したものではないかと想像される．2020 年に牧野の代表的著書『牧野日本植物図鑑』（牧野 1940）出版 80 周年を迎え，筆者はその年の秋，北隆館から図鑑の原図を借用し展示する機会に恵まれた．この準備のための調査を行うなかで，後述する向坂（1956）によって記された記事から，向坂が図鑑編纂において縁の下の力持ち的なポジションにあったことが判明し，上記の書簡の内容を詳細に把握する必要があると考えられた．また，高知県立牧野植物園の文庫資料から，向坂が牧野に送った書簡（葉書 5 通･手紙 1 通）が確認された．本稿では，これらの書簡類を調査することによって，図鑑編纂の経緯に関して，牧野と向坂の間でどのような交流が行われたのかを明らかにしていきたい．まずは，ほとんど知られていない向坂の経歴に触れ，次に二人の交流の要である牧野の図鑑編纂に関する向坂の記事に言及してから，本題に入りたい．

1. 向坂道治の生涯

向坂についてまとめられた資料は少ない．大場（2007）は江戸時代から近現代まで日本の植物学に貢献した人物を網羅的に紹介してはいるものの，向坂については，恩師三宅驥一（1876–1964）の項目に「牧野富太郎の植物図鑑改訂には門下の向坂道治を専任の編纂係として派遣した」と記述したのみで，向坂についての言及が他にないのはいささかさびしい気がしてならない．

向坂は植物学者で，著書として『植物渡来考』（向坂 1953），『イチョウの研究』（向坂 1958）などがあるが，生涯最大の業績は，『牧野日本植物図鑑』の編集に参与したことであろう．同図鑑では，向坂が輪藻植物門の執筆も担当している [1]．同図鑑の序に牧野が記して感謝の念を捧げているように，図鑑編纂事業の進捗における向坂の役割は三宅とともに見過ごすこのできない重要なものであった．

向坂は，自身が指導した早稲田大学生物同好会による会誌『早稲田生物』14 号の「向坂道治先生古稀祝賀号」にて，略歴（1965a）と「植物とともに六十年」というタイトルで自伝（1965b）を記している．まずは，向坂の略歴を記す（一部省略）．

1895 年東京・日本橋に生まれる
1922 年東京帝国大学理学部植物学科選科修了
1924 年同大学農学部講師（1955 年停年解任）
1925 年第一早稲田高等学院講師

図 1 a.　アルバム表紙 個人蔵.

図 1 b.　アルバム見開き 個人蔵.

1935 年第二早稲田高等学院教授
1949 年早稲田大学法学部教授
1964 年同大学教育学部教授

逝去の年は 1979 年である（向坂隆一郎 1979）.

次に「植物とともに六十年」に拠って向坂の人生を辿ることにする．これによれば，少年の頃の向坂は身体が弱く，家にいることが多かったので，種子をまいてその発芽を観察していたという．植物学の道に進むきっかけはこの頃にあったといわれる．やがて横浜の県立第一中学校を卒業し，経済的に正規のコースを歩むことがむずかしかったが，兄のおかげで知遇を得た旧制第一高等学校の和田八重造の紹介で東京帝国大学農学部教授の三宅と出会い，学費を出してくれるということで大学の選科に進む道が開けた．中学卒では受験が困難であったが，周囲の支えもあって 3 度目に合格した．

大学では植物形態学の藤井健次郎に就いてイチョウの研究を卒業論文のテーマとして，大学卒業後もその研究に勤しんだ．しかし研究成果は思うように出ず，向坂は「イチョウをやっていて，40 年もたって未完成であるということはお恥しいことであるが，いかに研究ということが至難のものであるかということがわかった」と記している．一方で，「向坂は学位もとらず平々凡々におわったといったら，学位論文などというものは 20 年もたつと意味がなくなるが，向坂君がとりくんだあの牧野さんの植物図鑑は日本で植物をやる人は必ずあの図鑑を手にしている，たいしたものだ」と友達から会食の席でほめられた話も残している．また，以下の引用は向坂の図鑑への思い入れがいかばかりであったかを示すものである．

「この植物図鑑に費やした私のエネルギーは大なるものであった．選科を修了する前年，つまり大正 10 年から大正 14 年まで，おそらくは私の生涯であれほどのエネルギーを消耗したことはあるまいと思う．初めはアルバイトであったが，北隆館と牧野博士の信頼で没頭してしまった．自分のちっぽけな研究をするより，大牧野の知識を結集してやろうと決心した．大正 14 年に一段落ついたが，またしても北隆館にたのまれて，昭和 16 年（筆者注：昭和 15 年）の牧野日本植物図鑑の出版まで編集に参与した．おもえば私の半生は植物図鑑にあったのである．」

さらに向坂は，牧野の図鑑編纂のみならず，川村清一（1881–1946）の『原色日本菌類図鑑』（川村 1954, 1955）の編集を担当したこともあった．これについて，向坂（1965b）は「私のような男がいなかったら川村博士の業績は永遠に出版されなかっただろうと思うと生きがいがあったと思った」と述べている．古希を迎えた向坂は，「植物とともにあるいてきた自分の生涯を幸福であったと思っている」としてこの自伝を結んだ．

2. 牧野の植物図鑑編纂の経緯—向坂道治の記事より

向坂は自伝以前に，半生を捧げた牧野の図鑑編纂に関する記事を書いた．それは『出版ニュース』352 号に掲載された「「なんとかなるろう」という人生哲学」[2] で，牧野の生きざまと図鑑が出版されるまでの経緯が述べられる（向坂 1956）.

記事の前半では牧野の人生について，「先生の生涯というものは，この一日の採集会の累積である．……目的なしのみちくさ先生の牧野博士は，目的地（死）にゆきつかないらしい」というような，採集にいっしょに出かけ，身近にいて牧野をよく知る向坂だからこそ書くことのできる事柄が綴られる．後半は図鑑の出版に関して「三十三年かかってやっとできた植物図鑑」という小見出しをつけて，『植物図鑑』（東京博物学研究会　1908）の改訂にはじまった『日本植物図鑑』（牧野 1925）の出版という「バラックづくり」，続いてその大改訂となる『牧野日本植物図鑑』（牧野 1940）の完成という「本建築」が語られる．以下，向坂（1956）が述べる詳細を紹介する．

まず「バラックづくり」はこうである．1908 年に出版された『植物図鑑』の広告が雑誌『科学知識』に出ていたのを見た三宅が，あまりにも現物にふさわしくないとして北隆館に注意したところ，後に同社社長となる福田良太郎が「名実ともにそろった牧野先生の図鑑にしてもらいたい」と三宅に頼んだ．1922 年のことである．牧野と懇意にしていた三宅は牧野に改訂をすすめたが，牧野は植物採集と押し葉づくりに忙しく一向に原稿はできない．そこで三宅は，牧野を旅館にいわゆるカンヅメにして，専心するようにした．三宅は，「まるで牧野先生の家庭教師にでもなったように，旅館では机の前にすわりこんで，牧野先生の口述を速記」し，「新進の理学博士が，牧野先生の筆耕生になるという意気ごみに，さすがの牧野先生も，頭をなでながら一つ一つの植物の記事を述べられ」たのである．

次に「本建築」となる『牧野日本植物図鑑』の編纂は 1931 年 1 月に着手するが，牧野は一向に執筆は取りかからず植物採集に精を出していた．そのため三宅が東京

帝国大学理学部植物教室の本田正次（1887-1984) に話をし，当時教授であった中井猛之進（1882-1952）の賛意を得て，分類教室総出で植物の解説を書くことになった．牧野はこれを校正するのだが「赤ペンでベタベタに校正される．校正だか，書き直しだかわからない．そうなると大日本印刷の榎町工場が苦情をいい出した．組みおきを一年も二年も，なんとかなるろうでは困ると，直しの多いことはよいとしても，直しで時間をとっていては組んだままにしておかなければならない」と文句が出てしまった．そのため一時は企画をあきらめるという危機もあったが, 印刷工場がなんとかするといってくれて，1937 年に校正が進捗した．そして 1939 年末に全原稿の校了，翌年 9 月に図鑑が出来た．この時，「衆力石を動かす」と牧野が大書した．以上が向坂の記述であるが，牧野の大書は多くの人に支えられたことに対する感謝の表われであろう．

小見出しにある「33 年」は，上記の 2 段階の出版に，1955 年の『牧野日本植物図鑑』増補版発行までの道のりを加えたもので，1922 年の編集開始から 33 年の歳月をかけてようやく牧野の植物図鑑は完成したと向坂は理解していたことを示している．

3. 牧野富太郎と向坂道治の書簡の遣り取り

(1) 概要

記念庭園に保管される向坂宛書簡は，1923 年～ 1952 年にかけて書かれたもので，この間 1942 年 9 月の葉書をもって中断し, 終戦後の 1948 年 4 月に再開している．内容は主として植物図鑑の編纂，東京植物同好会（現牧野植物同好会）の活動，牧野の採集旅行などである．牧野のお得意の「チョット」来てほしいというような頼み事やお互いの健康を気遣う文章，また向坂が贈った品物に対する礼状なども多い．

これらの書簡のうち最初の葉書は 1923 年 12 月 17 日付けで書かれた．すでに見たように向坂（1956b）は 1921 年ごろから図鑑の編集を手伝いはじめたと述べているので，数年後からの葉書が残っていることになる．この葉書には，「約束の標品すべてに名称を書き入れたので出勤ついでに立ち寄ってほしい」旨が書かれている．一方，最後の向坂宛葉書は 1952 年 1 月 24 日に書かれ，書き出しに「昨日は三宅君も来られ誠に愉快でした．こんな会が時々あるとよいがナー」[3] とあるので，牧野の図鑑に関わった気心の知れた人物が集う会合が開かれたと見られる．続いて，向坂の教える早稲田大学の学生が行ったクサリケイソウ（珪藻類の一種）の実験に関して，どこの泥を持ってきたのか，その状況をまとめた短文を綴ってほしいと頼んでいる．自分がずいぶん前に土佐で見たものについては『牧野植物混混録』11 号に記事を載せたから，発行されたらお渡しすると牧野は書いた．同号（1952 年 1 月）には，「クサリケイソウを最初に日本で見た人は誰か」という記事がある（牧野　1952）．内容は 1892 年 6 月に五台山南側山下にある池の底の泥を顕微鏡で観察して，活発に左右に往復運動するクサリケイソウに目を瞠った体験を回想したものである [4]．

向坂の牧野宛書簡は，最初が 1948 年 4 月 15 日で，二人の遣り取りの再開を告げている．最後は 1953 年 10 月 6 日で，牧野が最後に向坂へ宛てたものより後である．これには牧野が向坂家の法事に列席したことへの御礼にはじまり，「門なし時代の，富んだろうとは飛んだ間違いでなく，今や名実ともに富太郎となって長寿を祝福仕ります，富んだろうから，会費を頂き，私として過去四十年，先生のために会費は集めたが先生から受取るときチトまごつきました」と書かれている．会費とは東京植物同好会のそれと見られ，長年向坂は会の日程や採集地を調整し通知する役割を担っていたことが多数の葉書から読み取ることができる．また, 葉書に書かれた「今や名実ともに富太郎になっ」たという件は二人の長い交流を感じさせる．次の節では，牧野の植物図鑑に関する書簡を詳しく紹介する．

(2) 牧野の植物図鑑について

植物図鑑に言及のある書簡は，『日本植物図鑑』（牧野 1925）関連のものと『牧野日本植物図鑑』（牧野 1940）関連のものに分けられる．前者の葉書はあまり多くなく，出版の 1925 年に書かれた向坂宛の葉書から，牧野が図鑑の図の描画に励んでいる様子が推察される．一例を示すと，同年 3 月 25 日の葉書には「拝啓，然れば昨日ハ失礼仕候（つかまつりそうろう），扨図大馬力かけ候為め来る二十七日一杯ニ合計二十枚出来可致（いたすべき）候間（〔昨夜も二時過ぎまで仕事ス〕の一文を行間に加筆），右書肆へご請求致し被下度（くだされたく）候，二十九日か三十日ニ貴へ候様御手配のほど願上（ねがいあげ）候……」と書かれる（図 2）．牧野が「大馬力」をかけて図に取り組み 2 日後には 20 枚出来上がるであろうと言い，図の代金を出版社に請求して欲しいと向坂

に頼んでいるのである.

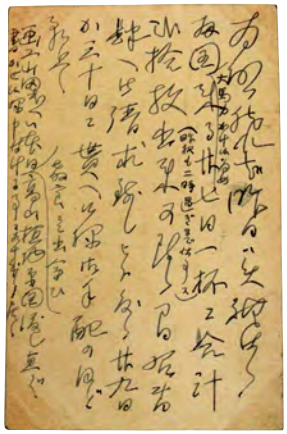

図２．向坂道治宛牧野富太郎筆葉書（1925 年 3 月 25 日）個人蔵.

『日本植物図鑑』は，『植物図鑑』に掲載された図と文章を改めることからはじまった編纂事業で，図と文章を新たに用意する必要があった．向坂（1956）の記事には，図の描き手として水島南平の名が記されたが，牧野自身も図の描画を受け持ったことは，北隆館が所蔵する『日本植物図鑑』の原図に「牧野」という著名のある図が存在することからも明らかである（牧野図鑑刊行 80 年記念出版編集委員会 2020）.

次に『牧野日本植物図鑑』が起稿されたのは，同図鑑の 1070 ページに「起稿　昭和 6 年 1 月 29 日」と記載されていることから，1931 年であることが分かる．1931 年 7 月 25 日の向坂宛の葉書には，「御ハガキで拝歌をありがとう．神様の光りの出るは出るようにそばであやつる人によるなり．今夜羽前へ向けて出陣」と記されている．このうち「神様の光り……」の箇所は，周りの人が牧野を支えてくれるようにという願いをそれとなく示し，『日本植物図鑑』のときに編集の労を執ってくれた向坂に対して，今回も頼りにしているという意味合いが込められているのであろう．ここに記された牧野宛の「御ハガキ」は今回の調査で確認することができなかったが，歌が詠まれ「神様が光り輝いてください」というような内容であったと推測される．また，同年 8 月 7 日付の葉書では，「図鑑の件，日頃御勉強下さいまして大ニ喜び且つ大ニ感謝して居ります．何分宜敷御願い申上げておきます」とある.

その後しばらく図鑑関連の書簡は見当たらないが，1937 年になると牧野が校正に勤しんでいる様子を伝える葉書が出てくる．例えば，2 月 11 日の向坂宛の葉書には，「其后御変りない事と御慶び申上げます．扨例のもの出来上ったのを別包で御廻しいたしました．次のもの大急で取かかっています．どうも文章がマズクて割合いに時間を要します．前回のは誠に能く出来ていて世話なしでしたが今回のはそれとハ大違いで原文が前回のように上手に出来ていません」とある．向坂（1956）は 1937 年に図鑑の校正が進捗したと述べているので，牧野が取り組んでいる作業は図鑑の校正と推測される．同年 3 月 18 日の向坂宛の葉書には，「一昨日ハ失礼いたしました．又御ハガキをありがとう存じます．別封で校正済の分を御廻しいたしました．またその半分が残っていますがこれも二，三日の内ニ送ります．ご覧の通りどうもマズイ処があって大分赤くなりました．従て相当時間がかかりますがこれハどうしても直しておかねばならぬ最小限度です．不取敢右本日御送りいたしまして御座いますで御座いますで御座いますで御座いますで御座いますで御座いますで御座いますで御座います……」とある（図 3）．繰り返しの文字はだんだん小さくなって点々となり消えていく．牧野の葉書は奇想天外なところがあっておもしろい.

図３．向坂道治宛牧野富太郎筆葉書（1937 年 3 月 18 日）個人蔵.

校正は簡単に手を入れれば済むものもあったが，多くはかなり手間取る原稿のようで牧野にとってすんなり進むことではなかった．暑い時期は「連力」が鈍ったとある．校正は翌 1938 年 7 月頃まで続いたと見られる．1939 年 2 月 3 日の向坂宛の葉書には，校正刷り送付の礼が述べられ，今度はそれに手を入れるため奮闘することになる．同月 5 日の葉書には「……今四日夜ニ入り両国駅出発，明五日の夜ニ帰宅します．それから馬力をかけ二枚でも三枚でも出来次第と差上げますからどうぞ御百度をふみ下さい．可成ムダ足のない様に心掛けます……」とあり，4 月 6 日は「……別封で校正手入れ済の彼の原稿を御送り致しました．何分超五十の八十枚程のものである故存分時間がかかりましたが，此四，五日は何にも外の事はせずに大勉強でやりま

したので割合いニ早く片付きました．次が直ぐ頭を出しかけていますから，またそれをたいらげねばなりません」とある．そして同年 11 月 16 日では，製本の型を見て「中々高尚で佳いと思いました」と感想が述べられた．

『牧野日本植物図鑑』は 1940 年 3 月 31 日に脱稿し，1940 年 6 月 20 日に校了となっている．同年 2 月 7 日の葉書（北隆館社員小山惠市宛）[5] には，「図鑑の中のいろいろの附属物を削除する事は考えの至らぬ所で私は賛成しない．口絵もあってよいと思ふ．可成いろいろのものがあるのが便利であるからいろいろのものを略するのは不賛成です」という図鑑の構成に関する牧野の考えが示され興味を惹く．実際，図鑑の口絵にはキバナノショウキランをはじめとして 9 点の着色図が掲載され，図鑑の線画とは異なり色付きである分，植物のあり様をわかりやすく伝えている．また，口絵の前には，つまりタイトルページをめくると「著者近影」の写真が載り，図鑑の読者を温かく迎えてくれる．この辺り，作り手がどのような人物であるかを示し図鑑に親しみをもってもらおうとする牧野のアイデアではないかと思う．口絵の最後には，真っ赤に手を入れた原稿の写真も載せ，図鑑を作り上げる苦労の一端を偲ばせる．また，6，7 月のハガキからは，「序文へ大分筆を入れ大改造をやりました．大阪で清書が出来たら送りします」（向坂宛葉書，1940 年 6 月 26 日），「序文承知しました．一両日中に御廻し致します」（向坂宛葉書，1940 年 7 月 20 日）とあることから牧野が序文にかなり手を入れたことが分かる．こうして図鑑は 10 月 2 日に発行となった．

(3) 『牧野日本植物図鑑：学生版』について

『牧野日本植物図鑑』完成までの道のりは以上であるが，次に『牧野日本植物図鑑：学生版』（牧野 1949a，以下学生版と略す）の出版について述べたい．それに関連する村越三千男 [6]（1872–1948）の図鑑にも手短に触れる．

学生版は，大冊である『牧野日本植物図鑑』の文を簡潔に，図を縮小した版で，野外で持ち歩くには便利なサイズである．編集については向坂と佐久間哲三郎（北隆館社員）に負うところが多いと牧野がその序に書いているが，向坂が解説文の編集に深く関与していたことが書簡から伺える．

『牧野日本植物図鑑』刊行の後，1941 年 11 月 3 日の向坂宛葉書には「小図鑑の文章の方山下助四郎君 [7] に依頼して節約さすれば宜しくはないかと存じます．教室の人では彼此れ面倒があれど山下君なれば之れなく至極よいと思われます」とある．ここで初めて「小図鑑」という言葉が登場した．同月 25 日の向坂宛葉書には，「……ただ問題は彼の小図鑑ですが方々からこれは是非早くやらんといかんと警告を受けています．それには何か切迫した事がありはせんかと思います．それがただのすすめではなく警告となったではないかと思います．故に北隆館もヤルと腹をきめ積極的に出る必要があろうと思います．彼の御承知の通り村越の小型本がありますがどっかの本屋を背景にそれを改正しているかも知れません……」と書かれた．ここで牧野が恐れているのは，村越が『牧野日本植物図鑑』の図を牧野の承諾を得ずに用いて「小型本」の改正版を出版する可能性であったと考えられる．

この小型本は，村越の『集成新植物図鑑』を指していると見られる．村越は，牧野の『日本植物図鑑』の発行日より 1 日遅く 1925 年 9 月 25 日に『大植物図鑑』を出版した後，図鑑の小型化を考案し 1928 年に『集成新植物図鑑』を出した．この図鑑は 1932 年の大増補版を経て，村越の生前では第 14 版（1941 年 8 月 20 日）まで版を重ねた（村越 1941）．問題は，牧野が新しく用意した『日本植物図鑑』の図を 1928 年の初版において村越が使用したことである．確かに初版の序文で村越は，『日本植物図鑑』の図を参考にしたことおよびそれらの大部分に「図版牧野博士著ニ拠ル」と記入したことを述べているが，実際にはその記入なく使用された図が多数見られる．いずれにしても牧野にとっては無断使用であった（俵 1999）[8]．したがって，『牧野日本植物図鑑』を完成させた牧野は，村越が自分の許可なく同図鑑の図を使用するのではないかと案じたと思われる．それは，同図鑑の奥付けの前ページに掲載される「警告」から明らかである．これには，今まで私の図を勝手に使用している者がいてその書が流布しているが，本書の図を著者の許可なく勝手に使用することを許さないという事柄が厳しい口調で書かれた．

その後，1942 年 1 月 20 日の向坂宛葉書から，小図鑑用の原稿用紙ができ，向坂と山下が分担して小図鑑用に文章を短縮する作業にとりかかることになったと分かる．しかし，この作業は進まなかったようで，『牧野日本植物図鑑』の小図鑑が学生版と称して出版されるのは太平洋戦争後の 1949 年である．戦時中，牧野と向坂の遣り取りは途絶えていたようだ．

二人の遣り取りは，1948 年 4 月 15 日に向坂が牧野に宛てた「久しく御無沙汰仕りました．植物図鑑の重版ができ佐久間様より話しあり御喜び申上ます．戦争から御

疎縁に打ちすぎ失礼しておりましたが四月二十四日の第八十七回御誕生日ニ御祝いに向いたく存じます」という葉書（1948 年 4 月 15 日）から再開したようである.『牧野日本植物図鑑』の重版については，1944 年に 4 版が発行となった後中断し, 1948 年 3 月 30 日に再開し 5 版となった. 牧野の返書（同年 4 月 20 日）には, 重版発行の喜びと, 久しぶりに会える楽しみが書かれた. ちなみに記念館の常設展示室には，1948 年 4 月 24 日，向坂，牧野とその家族が写った集合写真が展示されている（図 4）.

図 4．牧野富太郎とその家族と向坂道治（1948 年 4 月 24 日撮影）個人蔵．　後列向かって左端の人物が向坂.

小図鑑出版の件は，1948 年 5 月 5 日の向坂宛の葉書から再開となった. すなわち学生用の植物図鑑を作る計画がまとまり，向坂がその担当になったことが述べられた. これについて「成るべく急いでやって世間をアット言わせましょう. そしてお互に大いにビーフでも食う代金を作りましょう. そして出来上ったら何処かで一同が祝杯を挙げましょう」と牧野は記した. 5 月 24 日の向坂宛葉書では，紙の具合でポケット用の図鑑を作ることがむずかしく，2000 種ぐらいを掲載し，机の上で使うものにすることが提案された. その後，向坂は牧野の図鑑の文章を何度も読み返し，簡潔な文に改めた（牧野宛葉書，8 月 12 日）. 10 月 28 日の向坂宛葉書において，牧野は「印税を半分永久に差上げる事は貴台幷に佐久間君の経済を慮った私の意見でしたから其辺何等の御心配も入りません. 」と一日も早い図鑑発行を希望した. 翌 1949 年 1 月 1 日には向坂が初校の校正に努力し，同月 4 日の葉書には，牧野も校正刷に夜通しで校正し，「ぜひとも自分が全部に一度目を通さなくてはいけない，競争者に負けてはならないから」と記し，両者ともに校正に励んでいる様子が伝わる.

ところが，思いもかけないことが起きてしまう. それは，同年 4 月 3 日の向坂宛葉書で言及された北隆館における火事騒ぎである. 続く同月 7 日の葉書において牧野は，「正誤表を図鑑に添えなければ読者に申し訳が立たない，誤りを伝えては自分の顔も台なしになりかねない」と正誤表の作成を提案している（図 5）. 同月 8 日の葉書では図鑑見本刷りを見て，校正で「「トウコギ」を「タウコギ（田五加）」と訂正したのに「トウコギ」になっているのはどうしてか，校了にした人の失策だ」と牧野は指摘した. 牧野はこの頃立て続けに葉書を送っている.

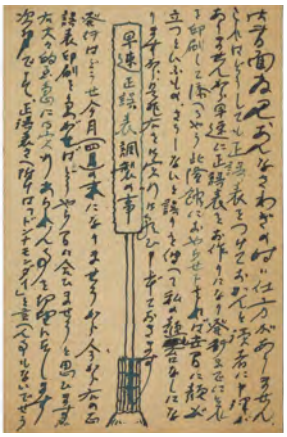

図 5．　向坂道治宛牧野富太郎筆葉書（1949 年 4 月 7 日）個人蔵.

同月 9 日の向坂の返信からは，学生版の校正の状況が把握できる. すなわち北隆館の担当者が「タウ」を「トウ」に統一して直したので「トウトウこんな結果になり私からもキック攻撃し」たと言い，また,「最後のハリコミで学名と図と記事を一枚の台紙にハリツケる時もとてもゴタゴタして誤りを」し，できる限り直したがその通りに行かず閉口していると言う.「火事騒ぎで一ヶ月以上かかって入念にハリコンだものを一日でやり直すので，全くの素人が総がかりでやりましたので実に一夜漬けの感がして正誤表をつくりつつアキレております. まるで戦争騒ぎでありましたから，そして今日やっている正誤表もただ時間をせかれますのでまだまだ完全とは思いません. こんなナサケナイ事はありません. 」とあることから，牧野の言う正誤表の必要や表記ミスの事情が分かる. さらに向坂は「牧野先生がカンカンになって慨嘆されることと存じます. 然し村越事件で私の方は幾分助かったわけです. 村越事件がなかったら，それこそ大変だったと考えております. 先生の憤慨が村越の方へそれたのでまーまー助りました，クワバラ，クワバラ」と続ける（図 6）. こうして学生版は発行に漕ぎ着けた. 初版の奥付には「昭和 24 年 4 月 10 日初版発行」と記され, 正誤表が見返しに挟まれることとなった[9].

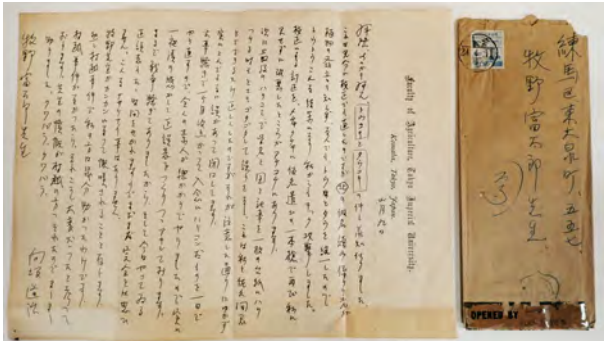

図６．牧野富太郎宛向坂道治筆手紙と封筒（1949 年 4 月 9 日）高知県立牧野植物園蔵.

向坂の言う「村越事件」とは，先述した 1949 年 4 月 3 日の向坂宛葉書において，牧野が「扨村越の図鑑昨日手にしまして閲覧するに多数「牧野植物図鑑」の図を盗み取っています．でこれはどうしても版権擁護，又今后の為めに裁判沙汰にせねばならぬと存じます．若し右を許客しておきますと，今後増補毎に取られて利用せられるから此際断然出訴する必要が大ニあります，又他への見せしめにもなりますので，今際弁護士とも篤と相談して訴状を提出せねばならんと私は決心しています．北隆館はどうするつもりか顔に泥をぬられてはだまっているわけには行きますまいと存じます．今日佐久間君へもハガキを出しておきました」と記したことを受けて，そう呼んだのである．

牧野が手にした「村越の図鑑」は，この葉書が書かれた前月に発行の『集成新植物図鑑（復興版）』（第 15 版 1949 年 3 月 12 日）を指しているのであろう（村越 1949）．同図鑑は，太平洋戦争の間中断していたがこの年に出版社が発行したのである．村越は前の年に亡くなっている．牧野は復興版を手にして，第 14 版と同じ版であること，つまり 14 版まで村越が借用した牧野の図をそのまま使っていることに気がついたのであろう．初めての学生版の発行を間近に控えて復興版に先を越されたという思いもあったかもしれない．4 月 14 日の葉書では「村越の件此際是非断然たる処致を取らなければこれから先きが大変ですから，北の英断を待っています」と牧野は記した．「北」とは北隆館のことであると考えられる．

学生版刊行後，同年に牧野は『牧野日本植物図鑑（第 7 版）』（1949 年 11 月 20 日発行）を出版した（牧野　1949b）．これは同図鑑の最初の改訂版である．その「巻頭の一言」において，『牧野日本植物図鑑』は新たに編纂された「独立独歩の書物」であり，「他人の図を盗み取る」画工のつくった「インチキ本」とは全然異なるものであると牧野は言い放った．しかし続けて「強て歯牙に掛けるに足らない此んな小人を相手にする」ことは「我が品位に関わる」から放って置こうと述べられているので，村越の図鑑を訴える手段には出なかったと思われる．村越の逝去をこの時点までに牧野が知った可能性もあろう．

おわりに

以上，書簡を通しての向坂と牧野との交流を見てきたが，向坂（1957）は「牧野富太郎博士の旅だより」という記事を，1957 年 1 月に逝去した牧野を偲ぶ『採集と飼育』の特集号に掲載した．この記事は「牧野博士は，70 歳 80 歳になられても，たえず各地方の植物採集会を指導された．そして旅さきから，よくおたよりをくださった．今日になっては，なつかしい思出（ママ）である．そのなかから，面白そうなものをピックアップしてみよう」という書き出しで向坂宛の葉書 36 枚を写真付きで紹介したものである．記事からは，向坂が葉書をはじめとした牧野との思い出の品々を大切にしてきたことがよく伝わってくる．確かに，牧野の葉書のなかには旅先で買い求めたと見られる絵葉書が目立つ（図 7）．その後，向坂（1969）は「牧野富太郎博士の採集スタイル」という記事を同雑誌に掲載し，牧野の採集時の写真と，採集にまつわる面白いエピソードを紹介した．

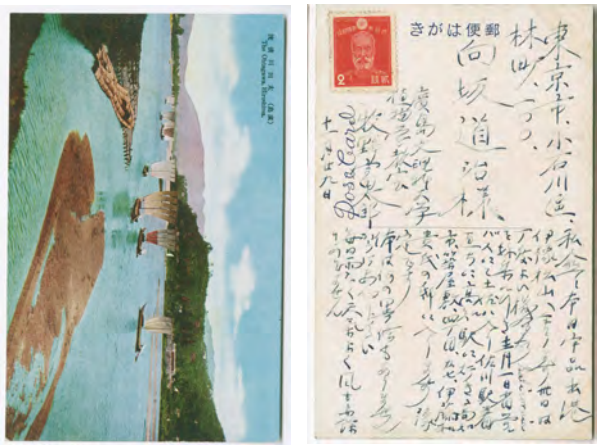

図７．向坂道治宛牧野富太郎筆葉書（1938 年 11 月 29 日）個人蔵.

向坂は牧野と出会い，図鑑の編集という大事業に携わることになり，他方牧野は向坂という自分を支えてくれる大事な協力者を得て後半生を歩むことができた．植物を愛する同志として誠に幸せな出会いであったと言えるだろう．

謝辞

本稿執筆にあたり，向坂道治宛牧野富太郎の書簡について調査を許諾してくださいました牧野一淳（かずおき）氏に，高知県立牧野植物園が所蔵する牧野宛向坂の書簡の閲覧および掲載を許可くださいました同園に，および『やまとぐ

さ』に寄稿の機会を与えてくださいました編集委員に感謝申し上げます．また，草刈清人氏のご紹介により向坂のご令孫山本愛子氏に，さらに山本氏のご紹介により三宅驥一のご令孫林百合子氏にお話を伺うことができました．なお，学生版の初版は東京大学総合研究博物館の池田博氏のご厚意により調査が可能となり，初版についてのご教示もいただきました．ここに記し感謝申し上げます．

注

1） 向坂が輪藻植物門を執筆した経緯について，現段階では，向坂の著書・論文などから明らかにすることはできなかった．
2） 本文献は藏田愛子氏のご教示による．
3） 本稿で引用する牧野と向坂の書簡は，旧字体および旧仮名遣いを現行のものに改め，適宜句読点を補った．また，書簡の日付けについて，記入のある場合はそれを採ることを原則とし，特に断らないが，ない場合は消印のそれを採った．
4） 顕微鏡に関して，前年 1951 年 7 月 6 日の向坂宛葉書に言及がある．すなわち，牧野が顕微鏡購入を希望したが値段の折り合いがつかないので，向坂にその折衝を頼む内容である．また，同年 11 月に撮影された「顕微鏡を覗く牧野富太郎」という写真（冨樫勝樹氏所蔵）があり，これらのことから牧野が購入をきっかけに，かつて顕微鏡を使って観察した時の感動を思い起こし記事にしたと考えられる．
5） アルバムには，向坂宛以外の葉書が 5 点含まれる．
6） 旧制の中学校で植物学と絵画を教える．退職後，東京博物学研究会を創設，牧野富太郎を校閲者として『普通植物図譜』（1906 ～ 1907 年），『野外植物の研究』・『続野外植物の研究』（1907 年），『植物図鑑』（1908 年）を企画・出版．その後『大植物図鑑』（1925 年）を刊行し，小型の『集成新植物図鑑』（1928 年）など工夫をこらした図鑑を生み出した．
7） 牧野富太郎の日記に 1922 年ごろから名前が記され（山本・田中 2005），成蹊学園の教師であったと見られる．牧野は，その年 7 月，成蹊学園創立者中村春二の依頼により日光で成蹊高等女学校の生徒に植物採集の指導を行っている．
8） 村越の図鑑に対する牧野の心情は，稿を改め別の機会に述べたい．
9） 池田博氏より，同一の奥付けをもつ初版でも頒布番号が遅いものは本文に修正が加えられ，修正箇所が少なくなった正誤表が挟まれたことをご教示いただいた．

引用文献

大場秀章（編）. 2007. 植物文化人物事典–江戸から近現代・植物に魅せられた人々. pp. 497–498. 日外アソシエーツ. 東京.
川村清一. 1954. 原色日本菌類図鑑 1–7 巻. 風間書房. 東京.
川村清一. 1955. 原色日本菌類図鑑 8 巻. 94 pp. 風間書房. 東京.
向坂道治. 1953. 植物渡来考. 154 pp. 早稲田大学出版部. 東京.
向坂道治. 1956.「なんとかなるろう」という人生哲学. 出版ニュース 352: 2–4.
向坂道治. 1957. 牧野富太郎博士の旅だより. 採集と飼育 19–6: 172–178.
向坂道治. 1958. イチョウの研究. 144 pp. 風間書房. 東京.
向坂道治. 1965a. 向坂道治先生略歴. 早稲田生物（早稲田大学生物同好会向坂道治先生古稀祝賀号）14: 4.
向坂道治. 1965b. 植物とともに 60 年. 早稲田生物（早稲田大学生物同好会向坂道治先生古稀祝賀号）14: 5–16.
向坂道治. 1969. 牧野富太郎博士の採集スタイル. 採集と飼育 31–1: 6–7.
向坂隆一郎. 1979. 父のこと,『向葉会』のこと. 故向坂先生を偲んで追悼文. pp. 3–4. 早稲田大学生物同好会. 東京.
俵浩三. 1999. 牧野植物図鑑の謎. 182 pp. 平凡社. 東京.
東京博物学研究会編・牧野富太郎校訂. 1908. 植物図鑑. 154 pp. 参文舎（後に北隆館）. 東京.
牧野図鑑刊行 80 年記念出版編集委員会（編）. 2020. 牧野植物図鑑原図集. pp. 17–234. 北隆館. 東京.
牧野富太郎. 1925. 日本植物図鑑. 1495 pp. 北隆館. 東京.
牧野富太郎. 1940. 牧野日本植物図鑑. 1233 pp. 北隆館. 東京.
牧野富太郎. 1949a. 牧野日本植物図鑑：学生版. 446 pp. 北隆館. 東京.
牧野富太郎. 1949b. 牧野日本植物図鑑（第 7 版）. 1237 pp. 北隆館. 東京.
牧野富太郎. 1952. クサリケイソウを最初に日本で見た人は誰か. 牧野植物混混録 11: 212–214.
村越三千男. 1941. 集成新植物図鑑. 951 pp. 大地書院. 東京.
村越三千男. 1949. 集成新植物図鑑（復興版）. 951 pp. 大地書院. 東京.
山本正江，田中伸幸（編）. 2005. 牧野富太郎植物採集行動録・昭和篇. 208 pp. 高知県立牧野植物園. 高知.